

## 「リリースできえも出産によって救われるだろう」 : ジョージ・マクドナルドの『リリース』における生命 の輪の継承と新生の可能性

隈部, 歩  
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/1560244>

---

出版情報 : 九大英文学. 56, pp.15-34, 2014-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

「リリスでさえも出産によって救われるだろう」  
—ジョージ・マクドナルドの『リリス』における  
生命の輪の継承と新生の可能性

隈部 歩

序論

— for even Lilith shall be saved by her childbearing. (*Lilith* 148)

人間はどうやって生まれたのか？最初の間人とはいかなる存在であったのか？この問いは人類が普遍的に持つもののようにあり、各国に伝わる様々な「最初の間人の誕生」に関する神話の存在がそれを裏付けている。その中でも「最初の間人」と聞いてまず浮かぶのは創世記におけるアダムとイヴではないだろうか。神は土からアダムを創造し、彼の肋骨からイヴを創造した。そして二人は人類全ての祖先となった。

しかしながら、イヴは最初的女性ではない。ユダヤ伝説に依るとアダムにはイヴ以前に最初の妻がいたとされているのだ。彼女の名はリリス。リリスは夫の肋骨から創られたイヴとは違いアダム同様土から創られた。同じように創られたことから平等を要求した彼女はアダムに従属するのを嫌がって彼の許を去り、眠る男性の誘惑者、赤ん坊の強奪者・殺害者となった。

本論で扱うジョージ・マクドナルド (George MacDonald) の最晩年の作『リリス』 (*Lilith*, 1895) にはアダムとイヴ、そして前述の「最初の女」リリスが登場する。作品中でリリスは人々、特に赤ん坊の生き血を啜ったり、実の娘ローナ (Lona) を床に叩き付けて殺したりといった破壊的で悪魔的な描写がされると同時に、どこか哀れで同情の念を起させ、惹き付けて止まない魅力を持ち合わせた人物として描かれている。本作品は先行研究においては主人

公ヴェイン (Vane) の成長や物語構造の問題に着目して論じられることが多く<sup>1</sup>、リリースに主眼を置く場合はフェミニズムの先駆者と見做されることもあるが大抵は負の側面を強調して論じられ、既存の秩序の転覆者、或いはファム・ファタルとして捉えられがちである。また人物関係に着眼する場合にはリリースーヴェインの関係に重きが置かれることが多い。しかしながら、本論では彼女の負の側面のみ強調するのではなく、今まで見過ごされて来た「何故リリースはそうになってしまったのか」ということに光を当て、更にリリースーローナの関係、即ち母娘関係に主眼を置くこととする。その際に重要視するのは母から子への生命伝達であり、それを本論においては「生命の輪」と呼ぶこととする。リリースが生命の尊さを理解できず、攻撃的な側面を露わにするのは、母から産み出され生命を受け継いでおらず神から創られたものであること、生命の輪を継承していないことに起因するのである。彼女は言わば生命の輪の起点であり、生命の尊さが理解できないがゆえに苦悩している。ローナを産み生命の輪の流れを自ら作り出したのに、苦悩を抱えた彼女は娘を殺しその輪を断絶させてしまったのだ。

冒頭の引用はアダムの言葉なのであるが、彼はリリースの救いの可能性について出産に触れている。それを踏まえ、本論では連綿と受け継がれて行く生命の輪の連なり・脈々と流れて行く生命の流れというものを理解できず、それゆえに苦しむリリースが回復すべきもの・必要とすることは、断絶させてしまった生命の輪を再び結ぶこととその輪に迎え入れられることであるという解釈を提示する。そのために彼女には2つの道が開かれている—1つは「生命の輪の継承」であり、もう1つは「新生の可能性」である。第一章では『リリース』の背景と、どのように、また何故リリースが生命の輪を断絶させてしまったのか示す。第二章ではリリースーローナ間で受け継がれるべきであった生

---

<sup>1</sup> 主人公ヴェインの成長に主眼を置いた論は多く、例えば『リリース』を彼の精神的な成長の物語と見做す Roderick McGillis の論“Liminality as Psychic Stage in *Lilith*.”等がある。また物語構造、特に結末部に着目した論としては Colin Manlove “The Logic of Fantasy and the Crisis of Closure in *Lilith*.”や Kelly Searsmith “Chiasmatic Christianity: *Lilith*'s Sense of an Ending”, David M. Miller “The (As Yet) Endless Ending of *Lilith*.”等が挙げられる。(この3つの論文は Harriman 編集の *Lilith in a New Light* に収められている。)

命の輪の重要性を示すために彼女達の特別な結び付きについて言及する。第三章では前述した二つの道について示し、最終的にアダムの「リリスでさえも出産によって救われるだろう」という言葉がどのように証明されたか述べる。

## I : リリス—最初の女、或いは母のいない母

リリスという女性はマクドナルドの創作ではなく、序論でも触れた通り伝説上の人物である。レイパーは彼女の起源を簡潔に纏めている。

Originally Lilith was a character in Jewish mythology, probably based on an earlier Babylonian figure. The first account of creation in Genesis ‘...in the image of God created he him, male and female created he them’ adapted in a cabbalistic retelling of the story in which Lilith was Adam’s first wife, and like him created from the dust of the ground. Being created equally with Adam, she demanded equality, and refused to obey him in taking the subordinate position in sexual intercourse. Rebelling, she fled and took to killing babies, over whom she claimed power, and seducing sleeping young men. She herself gave birth to demons and spirits, a hundred of whom were to die each day as a punishment for her refusal to obey Adam. Later she became known as Sammael’s (Satan’s) wife. (Raepier 365-66)

更にマクギリスはリリスの神話を詳細に論じ、19世紀におけるその受容を述べている<sup>2</sup>。リリスは人々の関心や想像力を掻き立てる存在であり、そのため彼女の神話は幾世期にも渡って多くの芸術家や作家達によって発展され潤色されて来た。ウィングローブはリリスに関して“Lilith offers the supreme embodiment of the blood-sucking Romantic *femme fatale*, a figure that haunted

---

<sup>2</sup> McGillis, “George MacDonald and the Lilith Legend in XIXth Century”を参照。

Goethe, Coleridge, Tieck, Gautier, Keats, Poe, Baudelaire, Le Fanu, Stevenson, and Stoker (to name only a few) and survives to this day in the ruthless vampire divas of *True Blood and Twilight*” (Wingrove 175)と述べている。

マクドナルドもまたリリスに魅了された内の一人であり、彼女についての物語を書きそれに『リリス』と名付けた。本作品はしばしば彼の最初の長編ファンタジー『ファンタステス』(*Phantastes* 1858)の姉妹編として見做される<sup>3</sup>。しかしながら、マクドナルドは『ファンタステス』を「それに掛かり切りになることなく二か月で書いた」(Greville MacDonald 290)のに対し、『リリス』には書き上げるのに5年もの歳月を要し、出版されなかった草稿が少なくとも8種類残されている。彼が幾度も加筆・訂正を加え長い年月を掛けて『リリス』を書き上げたことは、彼がこの作品に、ひいてはリリスという存在にいかに深い思い入れを持っていたかを示す。

リリスに対して抱いている自身の感情を表現しようとしてヴェインは “[m]y frame quivered with conflicting consciousness, to analyse which I had no power. I was simultaneously attracted and repelled: each sensation seemed either” (127) と述べている。愛と憎悪といった相反する感情を同時に引き起こすリリスという女性は、マクドナルドが自身の作家人生の中で描こうと追い求め続けた女性像正にそのもののように思われる。レイパーはこれに関して “[i]n many ways *Lilith* was the book MacDonald had been trying to write all his life, indeed had been writing all his life, and even after he had finished it he was excruciatingly aware of its shortcomings and inadequacies” (*George MacDonald* 365) と語っている。更にマクドナルドは彼女を彷彿とさせる先駆けのような人物達を『リリス』出版以前にも他の多くの作品の中にも描き続けており彼がこの不思議な矛盾する女性像をいかに熱心に捉え描こうとしていたかが窺

---

<sup>3</sup> マンラブは或る意味で『ファンタステス』と『リリス』は共に一つのファンタジーを作り上げている。」と主張している (*The Impulse of Fantasy Literature* 75)。又マクギリスは自身の論文“*Phantastes and Lilith: Femininity and Freedom*”において『ファンタステス』と『リリス』の類似点や結び付きについて指摘している複数の先行研究について言及している。

われる<sup>4</sup>。

最初の女リリスは生命の尊さを理解できない。ガーデンは彼女に関して“the ultimate devourer—as queen of hell, she is the cosmic power of death and destruction” (Gaarden 43) と述べる。生命へのリリスの無知は、彼女が母から産み出されておらず生命を受け継いでいないことに起因すると考えられる。本論では母から子への生命伝達を「生命の輪」と呼んでいるが、神によって土から創られ母がいない彼女は生命の輪の起点と言える。彼女は起点であることから来る苦悩を抱えており、破壊的で悪魔的な彼女の性質はこの苦悩の表れなのだ。生命の尊さを理解できない彼女は生命の輪を断ち切ろうとする。

リリスは大地から生命の源泉とも言うべき水を奪い不毛の地とすることによって生命の輪を断絶させると共に新たな生命が生まれる可能性も奪ってしまった。マクドナルドは他作品においても水に重要な意味を付与し、とりわけ誕生・新生 (birth/rebirth) と結び付けていることから<sup>5</sup>、ここでのリリスの水の強奪はそのまま生命の不法占有とすることができる。その後彼女はブリカ (Bulika) という都市に住んでそこを統治し、女性を不妊にしたり、赤ん坊を殺す等して住民達を絶えず恐怖に陥れていた。ブリカの或る女性がリリスは飼っている雌豹を放って赤ん坊を殺させるのだとヴェインに語っているが (114)、実はこの雌豹 (the spotted leopardess) はリリスの変身した姿であった。雌豹に姿を変えた彼女は生き血を啜ることで赤ん坊を殺そうとするの

---

<sup>4</sup> リリスという名の人物をマクドナルドは『リリス』出版以前にも「残酷な絵描き」 (“The Cruel Painter” 1864) と『ウィルフリッド・カムバーミード』 (Wilfrid Cumbermede 1872) という 2 つの作品に登場させている。更にマクドナルドはこの他にも、相反する感情を引き起こし、美 (beauty) と悪 (wickedness) の共存するリリスに類似した女性達を複数の作品に描いている。例えば『ファンタステス』のハンノキの乙女 (the Alder-Maiden)、「灰色狼」 (“The Gray Wolf” 1871) の若い狼女、「昼の少年と夜の少女」 (“The Day Boy and the Night Girl” 1879) の魔女ワトー (Watho) 等が挙げられる。

<sup>5</sup> 例えば、『お姫様とゴブリンの物語』 (The Princess and the Goblin 1873) においてアイリーン姫 (Princess Irene) は不思議な力をもつ大祖母 (the great-great-grandmother) の部屋でお風呂に入れてもらうのであるがそれは新生のイメージに満ちたものであった。他にも新生と結び付く水浴の場面は「黄金の鍵」 (“The Golden Key” 1867) にも顕著に見られる。又「軽いお姫様」 (“The Light Princess” 1864) では主人公の姫 (the Princess) の生命が湖の水と密接に結び付けられている。

であるが、この彼女の吸血行為は母—赤ん坊の役割の反転と受け取れる。何故なら普通赤ん坊は母の母乳、言わば母の血を飲むからである<sup>6</sup>。そうすることで赤ん坊は母から生命を受け取っており、母とは本来生命を与える者 (the life-giver) であるのに対しリリスは生命を受け取る者 (the life-taker)・貪る者 (the life-devourer) であるのだ。この母役割の転覆が吸血鬼としてのリリスの伝説の恐怖の中心であろうとウィングローブは指摘している (Wingrove 188)。更にリリスは赤ん坊を奪って殺す前にその母をも殺しており、そうして生命の繋がりを絶ち生命の川の流れ (the stream of life) を止めてしまう。加えて殺された母の残酷でグロテスクな姿 (“a pulpy mass, with just form enough left to show it the body of a woman” (123), “ a body, frightfully blackened and crushed, but still recognizable as that of the woman” (135)) には、自身にはいない存在であり且つ自らなるのを拒んだ母という存在へのリリスの激しい憎悪が示されている<sup>7</sup>。

リリスの赤ん坊への嫌悪は“a child will be the death of her [Lilith]” (115) という古い予言に帰することができる。彼女は赤ん坊を手当たり次第に殺すことによりその予言の実現を回避し永遠に生きようとする<sup>8</sup>。しかしながら無作為に赤ん坊を殺しているが彼女は予言の言う「或る一人の子供」が誰であるか気付いていたに違いない。彼女の血肉を分けた子供 (“the child of her body”

---

<sup>6</sup> ノイマンは、女性は3度に渡る「血の変容」、即ち月経、出産（以前胎児は母親の血液から作られると信じられていた）、産後母乳を出すこと（血液から母乳への変容）を経験し得ると述べている。Neumann, *Great Mother* pp.31-32 参照。

<sup>7</sup> 先行研究においては上記引用の不可解でグロテスクな二度の描写（原型を留めない位にまで痛めつけられた女性の死体が空から降って来る。ヴェインは近くの窓から投げ飛ばされたのだらうと認識 (123)) に具体的な解釈を加えられていないが、本論ではブリカの女性が「雌豹は赤ん坊を奪う際にその母親を八つ裂きにするのです」(114) と述べていることと二度ともその描写の後雌豹が現れていることから、リリスが赤ん坊を攫うためにその母親を殺害したのだと解釈する。

<sup>8</sup> リリスのこの行動は、ヘロデ王の嬰兒虐殺 (Matt. 2:1-19)、王位を篡奪されるという予言の成就を回避しようとして我が子（達）を飲み込んだクロノス（アポロドーロス 29）やゼウス（34）を彷彿とさせる。更にオイディプスの父ライオスもリリス同様我が子から殺されるのだらうとの予言を受けており、彼はそれを回避するために息子を遠くに捨てたのであるが、最終的にその予言は成就してしまったのであった (130-31)。子が親を脅かすというのは古くから見られるテーマのようである。

(148) —彼女自身の娘ローナであると。

神話において女性が独力で生命を産み出し男性の力に対抗しようとするエピソードが見受けられるが<sup>9</sup>、リスが娘ローナを産んだのも女性にのみ与えられた生命を産み出す能力を誇示して夫アダムを服従させようとしたためであった。彼は“*One child, indeed, she bore; then puffed with the fancy that she had created her, would have me fall down and worship her!*” (147) とヴェインに語っている。ローナの誕生に本当に全くアダムが関わっていないわけではないだろうが、リスは神がアダムや彼女のことを創造したようにローナを自身の力で想像した (*create*) と考えており通常とは異なる産み方をしたようである。従来の研究では指摘されていないが作品中で何度も言及されるリスの脇腹の傷 (*a dark spot*) は娘ローナと関係があると考えられる。この傷は神がイヴをアダムの肋骨から創ったことを彷彿とさせ、「彼女自身の肉体からローナを創った」との推測を生む。彼女の傷とローナとの関係については次章で詳しく述べる。

しかしながらあくまで自己として不死で在り続けたいと願うリスはローナを自分の不死性・生命力の流れ出す「開かれた水路 (*an open channel*)」として憎悪する。

Her daughter appears to her *an open channel* through which her immortality—which yet she counts self-inherent—is flowing fast away: to fill it up, almost from her birth she has pursued her with an utter enmity. (150, 強調は引用者)

マクドナルドは他作品でも出産時或いは子が幼い時の母の死を描いており<sup>10</sup>

<sup>9</sup> シッパー 『なぜ神々は人間をつくったのか』 pp. 39-44, 205-10, 288-94 参照。

<sup>10</sup> 例えば「昼の少年と夜の少女」におけるヴェスパー (*Vesper*) のニクテリス (*Nycteris*) 出産直後の死や『お姫様とゴブリンの物語』におけるゴブリン王子ヘアリップ (*Harelip*) の母の出産時の死とアイリーン姫の母の早期の死が挙げられる。また、『ファンタステス』の主人公アノドス (*Anodos*) も自身が赤ん坊の時に母を亡くしており、更に『リス』の主人公ヴェインも幼い時に母の死を経験している。(ヴェインの場合は母同様父も幼い時に亡くしている (5).)



それらは母子間の生命力の授受・奪い合いの表れと考えられるがそれを否定的に捉えるリリスの目には「子供の誕生」は「親の死」に映る(150)。また前述した彼女の死に関する予言の存在が彼女の娘への憎悪を倍増させ恐怖心をも芽生えさせているのだ。娘を殺すことにより自身の生命力の流出を止め不死で在り続けようと切望するリリス。「開かれた水路」として母が娘を拒絶し憎悪することは生命の輪の断絶を生んでしまった。

## II：母と娘の特別な結び付き

第二章では生命の輪の重要性を示すために存在を嫌悪・拒否され生命の輪を断絶されても尚繋がる母―娘間の特別な結び付きについて述べる。

母娘関係の特異性は様々な分野で指摘されている。精神科医の斎藤環は母娘関係が他の3つの関係(父―息子、父―娘、母―息子)に比べて際立って特殊であり極めて複雑な愛憎関係の温床になってしまうと述べる<sup>11</sup>。ギリシャ神話においても母娘の密接な関係性は描かれておりその最たる例はデメテルとペルセフォネの物語であろう(アポロドーロス 36-37)。『リリス』でも母リリスがデメテル同様娘を無我夢中で探し回っているが、デメテルと違うのはリリスの場合「全くの敵意(an utter enmity)」(150)を持って娘を殺すために探しているということだ。しかしながらどちらの母の場合でも娘がいなければ生きられないということ、彼女達の結び付きを断ち切るのはほぼ不可能であるということにおいては共通している。

作品中で明確に語られていないが、リリスが娘を殺すのを阻止するために何者か(神?)が母娘を引き離し、ローナは天使達によって養育された(150)。又アダムとイヴの娘マーラ(Mara)の化身と思われる白い雌豹は赤ん坊を殺そうとする斑の雌豹＝リリスからその命を救い森へと連れて行く。そうして

---

<sup>11</sup> 斎藤環『母は娘の人生を支配する』pp.9-18 参照。また、母娘関係についてのより詳細な議論については、エリアシェフとエニックの共著『だから母と娘は難しい』参照。本書において彼女達は多様な文学作品や映画に言及しながら母娘関係の孕む問題点や特異性について論じている。

生き延びたのがリトル・ワンズ (the Little Ones) という子供達でありローナは彼等の母役を務めている。彼女は森で赤ん坊を見付けるようになった以前の記憶がなく常に自身は「母であった」と自覚している。彼女は松村一男の言う処女母神のような存在であると言えよう<sup>12</sup>。“I do not remember ever being without a child to take care of” (175) と語り常に「母」であるローナは、アダムと一緒にいて子供を産むことを奴隷のようだと考え妻・母となることを拒否するリリスの対極に位置している。しかしながら、ヴィクトリア朝の理想的な女性像「家庭の天使」と世紀末に台頭して来た「新しい女」という全く対照的な女性像の体現者として各々描かれているようなローナとリリスではあるが、権力を持つ(持とうとする)という点では類似している。リリスが男性との平等を要求し、権力を欲する(“[...] her first thought was *power*,” (147)) のは前述の通りだが、ローナも彼女の「子供達」リトル・ワンズの中で絶対的な権力・支配力を有しており、母娘に共通点が見出される。更にリリスが殺そうとした赤ん坊達をローナが守り育てているというのも彼女達の結び付きの強さを浮き彫りにする。母が断ち切ろうとした生命の流れを娘が繋ぎ、流れ続けさせるのだ。

彼女達の結び付きの強さは、母が誰であるのか決して知らされることのないままのローナがリリスを見た瞬間に自分の母であると本能的に認識したことにも示されている。それに対してヴェインが何度かイヴの家で眠っている母の姿を見ていたにも拘らず最後の最後まで自身の母をだと認識できず、アダムに言われて初めて知った (229) というエピソードが対比的に描かれておりローナとリリスの結び付きの強さを際立たせている。更に彼女達がリリスの居城で対面した時の描写も実に注目すべきである。

“Mother! mother!” she [Lona] cried, and her clear, lovely voice echoed in the dome.

The princess [Lilith] shivered; her face grew almost black with hate; her

---

<sup>12</sup> 松村一男『女神の神話学—処女母神の誕生』参照。特に pp.56-64、第三章「処女母神の神話学」(65-90) 参照のこと。

eyebrows met on her forehead. She rose to her feet, and stood.

“Mother! mother!” cried Lona again, as she leaped on the dais, and flung her arms around the princess.

An instant more and I [Vane] should have reached them!—in that instant I saw Lona lifted high, and dashed on the marble floor. Oh, the horrible sound of her fall! At my feet she fell, and lay still. The princess sat down with the smile of a demoness. (184)

常に「母」であった処女母神のようなローナは、リリスの面前で「お母さん！」としか発することができなくなりまるで幼い子供のように瞬時になってしまうのだ。彼女は母に抱き上げられたかと思うとそのまま床に叩き付けられて殺されてしまう。女性が何かを抱き上げる姿にはやはり赤ん坊を抱くというイメージが付いて来るので、「母」ローナの子供返りも考え合わせ、この母娘再会の場面は暴力的な表現ではあるが生命の輪を断絶しても尚「母であり娘である」という事実を浮き彫りにしている。

母リリス—娘ローナの結び付きの強さは、不死性（生命力）の流出を止めるために娘の命を奪おうとする際、リリス自身も死んだような状態になってしまうことに最も顕著に表れている。これにはリリスの脇腹の傷と、不毛の大地で唯一流れている特殊且つ不可思議な温かい川（the hot stream）が関わっていると考えられ、彼女達の特別な結び付きはこれら二つのものに起因すると言える。「開かれた水路」という表現は傷のような印象を与えることからローナとリリスの傷との関係を示唆する。また脇腹の傷と言うと前章でも述べた通りイヴ創造の際アダムの脇腹にできた（であろう）傷を彷彿とさせる。聖書によると神は骨を取ってできたアダムの脇腹の傷を肉で塞いだ（Gen. 2: 18-25）リリスは神の真似事のようなものをし、独力で生命を産み出すことでアダムを服従させようとしたために脇腹に「開いた傷（the open wound）」（149）が残ってしまったのだと考えられる。

リリスは作品中で二度死んだような状態になってしまうのであるが、大変注目すべきことにそれはどちらもローナと密接な関係がある。一度目は彼女が娘を殺しに行こうと「温かい川」を跳び越えようとした時であり（i）、二

度目は彼女の居城で娘を床に叩き付けて殺した直後である (ii)。そして娘とリリスの傷との結び付きを証明するかのように、この二度の娘殺害の試みの直前に彼女は脇腹が痛むのか傷を押さえており、二度ともその試みの後に傷がより黒々と浮かび上がっている。

《ローナを殺そうとする直前の描写》

(i) “Thou [Lilith] also,” they [dancing skeletons] seemed to say, “wilt soon become weak as we! thou wilt soon become unto us!” I [Vane] turned mine to the woman—and saw upon her side a small dark shadow.

She had seen the change in the dead stare; she looked down; she understood the talking eyes; *she pressed both her lovely hands on the shadow, gave a smothered cry, and fled.* (87, 強調は引用者)

(ii) She pressed her hand to her side, and gasped. (184)

《ローナを殺そうとした／殺した直後の描写》

(i) [Vane was trying to revitalize Lilith.] Once as I did so [watching her state], *a shadow of discoloration on her left side* gave me a terrible shock, but the next morning it had vanished, and I continued the treatment—every morning, after her bath, putting a fresh grape in her mouth. (101-02, 強調は引用者)

(ii) [...] the princess lay back her seat, her face that of a corpse, her eyes alone alive, wickedly flaming. She was again withered and wasted to what I found in the wood, and *her side was as if a great branding hand had been laid upon it.* (185, 強調は引用者)

リリスとローナを隔てていた温かい川は生命の輪と密接な結び付きがあると考えられる。何故ならリリスが大地を不毛の地にしてしまったにも拘らずこの川は地表に唯一残った水の流れであることから生命の象徴だと思われるからだ。更にこの川に流れる水は温かく、金属のような奇妙な味がする (99) ことから正に生命の源＝血であるような印象を与える。そしてこの川は子宮

の象徴ともされる洞穴から流れ出しており (100)、この川に浸かると食物を摂取しなくても大丈夫だとヴェインが語っている (102) ことから、血のようであると同時に羊水のようでもあるのだ。正に生命の象徴とも言うべきこの「温かい川」をリリスが支配できず、非常に嫌悪感をも示す (108) のは、彼女の生命の輪からの疎外を強調する。自己として不死で在ろうと願い、娘を殺すことにより生命力の流出を止めようとしたのに、それはそのまま彼女自身の生命の流れをも止め、最も恐ろしい生きながらの死の状態をもたらしてしまった。ヴェインは彼女について以下のように考える。

She had killed her life [Lona?], and was dead — and knew it. She must *death it* for ever and ever! She had tried her hardest to unmake herself, and could not! she was a dead life! she could not cease! She must *be!* (206, 強調は原文通り、下線は引用者)

リリスは永遠の生ではなく「死の生 (a dead life)」を生きている。彼女は自身の「死の生」を終わらせる必要があり、そのために生命の輪を繋ぎ、生命の流れ (the stream of life) を流れ続けさせなければならないのだ。

### III : 生命の輪の継承と新生の可能性

#### 生命の輪の継承

リリスは断絶させてしまった生命の輪を再び結ばなければならず、またそうすることにより彼女は真の意味で輪の起点となれる。まず、彼女に開かれた二つの道のうちの一つ「生命の輪の継承」から論じることとする。

リリスが犯した娘殺しは実は擬似的なものであったと全ての母イヴは語る。

Nor have you either hurt a child. Your own daughter you have but sent into the loveliest sleep, for she was already a long time dead when you slew her. And now Death shall be the atonemaker; you shall sleep together. (215)

イヴはローナが(擬似的に)殺されるずっと前に死んでいたと言っているが<sup>13</sup>これにはアダムがリリスの「創造」における無知・無能について述べた言葉が関わっているように思われる。

Of creating, she knows no more than the crystal that takes its allotted shape, or the worm that makes two worms when it is cloven asunder. Vilest of God's creatures she lives by the blood and lives and souls of men. She consumes and slays, but is powerless to destroy as to create. (148)

リリスはローナを「創造した (create)」と認識しているが実は彼女は創造において無能であり、したがってそのような彼女から産まれた、もしくは「創造された」ローナは誕生した時既に死と同様の(真の意味では生きていない)状態であったと言えよう。よって既に死の状態であり「死の生」を生きているようなローナに擬似的な死を与え、誕生前の状態に戻すことは彼女の真の誕生に不可欠であったのだ。

リリスは大地から水を奪う際それを卵に入れて持ち去ったのであるが(75)それを常に手に握り締めていたようである。水が生命の象徴であることを考えると彼女は不当に生命を奪っていたと言え、それをマーラの言葉は裏付けている。

“So long? Then she [Lilith] has learned to do without it [her hand]: why should she open it now?”

“Because it is shut upon something that is not hers.” (210, 強調は引用者)

“Lilith,” said Mara, “you will not sleep, if you lie there a thousand years, until you have opened your hand, and yielded that which is not yours to give or to

---

<sup>13</sup> 奇妙なことにヴェインもイヴと同様のことを述べている。“[...] surely she died long ago!” (189)

*withhold.*” (218, 強調は引用者)

「死の家 (the House of Death)」で眠る前にリリスは、アダムとイヴ、マーラの3人共から固く握り締めている手を開き、中のものを放棄するように懇願されており、不当に奪っていた生命を解放し断絶させてしまった生命の輪を結ばなければならないのだ。だが自らの力手を開くことが最早できなくなってしまっていた彼女は、アダムに剣で手を切り離してもらわねばならなかった。

In a few minutes Adam returned with an ancient weapon in his hand. The scabbard looked like vellum grown dark with years, but the hilt shone like gold that nothing could tarnish. He drew out the blade. It flashed like a pale blue northern streamer, and the light of it made the princess open her eyes. She saw the sword, shuddered, and held out her hand. The sword gleamed at once, *there was one little gush of blood, and he laid the severed hand in Mara's lap.* Lilith had given one moan, and was already fast asleep. *Mara covered the arm with the sheet,* and the three turned away. (219, 強調は引用者)

アダムが水を握り締めたリリスの手、言わば生命の象徴を切る姿は臍の緒を断ち切る姿と重なるように思われ、それをマーラがシーツに包んで大事に抱えて行くのは赤ん坊を抱える助産婦の姿に重なり、この場面は出産を彷彿とさせる。アダムの助力により不当に奪っていた水=生命を放棄したりリスは新生に向かうための眠りにつくことができた。それからその生命の握り締められた手をヴェインが運び、まるで種を植えるかのごとく大地に埋めることによって、不毛の地は再び生命溢れる豊かな大地に戻れたのである (223-24, 246)。ヴェインが産婆のような役割を果たしてリリスは大地に生命を産み出し、豊かな大地を育む地母神のような行いをしたと言えよう。

ローナはリリスを見た瞬間に自身の母であると本能的に認識したが、彼女の「お母さん！」という呼び掛けは彼女達を繋ぐ架け橋となる。相互の認識

がこの母娘が生命の輪を再び結ぶためには不可欠であり、したがって彼女達が隣同士の寝台で眠るよう定められていたこと (217)、そしてリスがそこでの眠りを受け入れたことは、彼女が娘を認識したことで生命の輪を繋ぐ準備を示す。彼女達は並んで眠りにつくのであるが、その様子は出産の後共に眠る母親と赤ん坊の姿を彷彿とさせる。更にその後、死んだと思われていたローナは眠りから覚め生き返る。母に殺されたことで「死の生」を終わらせ、そして母と共に「死の家」で眠ることにより、彼女は真の意味で生命を受け継ぎ、真の誕生をしたのだ。リスはローナとの間で断絶していた生命の輪を再び繋ぎ、真の意味で起点となったのだ。ローナによって生命の輪を継承されたことは、止まってしまっていたリスの生命の流れを流れ続けさせる。

### 新生の可能性

ではリスに開かれたもう一つの道「新生の可能性」について論じることとする。新生をすることにより彼女は生命の輪に迎え入れられることになるのだ。これはマーラがリスに言った言葉の中にも表れている。

“A slave thou art that shall be a child!” answered Mara—“Verily, thou shalt die, but not as thou thinkest. Thou shalt die out of death into life. Now is the Life for, that never was against thee!” (207)

また母がいない母であるリスが、マーラとイヴとの関わりの中で初めて母的な優しさ・温かさに触れたのも重要である。更に彼女の新生の可能性はヴェインとの関わりにおいて、彼女があたかも赤ん坊であるかのように描かれていることにも予示されている<sup>14</sup>。

---

<sup>14</sup> リスが赤ん坊のような描かれ方をしているというのには、4つ根拠を示すことが出来る。1. 彼女を蘇生させようとする試みの中でヴェインが父親のように振る舞っていたこと (99, 109)。2. 子宮の象徴とされる洞穴の中で、羊水を彷彿とさせる「温かい川」の流れに彼女が水浴させられていたのは、擬似的な母体回帰と取れること。3. 葡萄の汁を彼女に与えるという彼の行動 (97) は、ローナが赤ん坊達に行っていたこと (62) と全く同じであったこと。4. リスがヴェインに行っていた吸血行為が、一般



アダムとイヴも、リリス同様最初の間人であるが、二人とリリスとは事情が異なり、最初の間人としての苦悩を抱えているわけではない。確かに彼等もまた産んでくれた母はいないが、神から生命を受け取ったと確信しているため生命の尊さを理解できるのである。一方リリスは母から生命を受け継いでいないだけでなく、神が彼女に生命を与えたという事実さえも否定する。彼女は自己創造によって産まれたという幻想を持ち、永遠に生きようとする<sup>15</sup>。そして生命の尊さを理解できず邪悪な存在となり、苦悩を抱えてしまっているのである。リリスは娘に生命の輪を継承させるだけでなく、自身も生命を受け取ったという事実を受け入れなければならない。マラーの「辛苦の家 (the House of Bitterness)」とイヴの「死の家」での滞在を通して、彼女は自己創造によって産まれたのではなく、他者によって生命を与えられたのだと理解できた。ガーデンはイヴをユング心理学におけるグレートマザー的な人物であると捉え「全ての母」として“the life-death-life cycle”を象徴していると述べる (Gaarden 32)。又シャーフスマは墓とも言及されるこの家をイヴの子宮と捉え、彼女を“life-death-life”を司るものと考えている (Schaafsma 54)。「死の家」と言及されるこの家は同時に「生の家」でもあり、そこで眠ることによりリリスは「死の生」を終わらせ新生の可能性を得られるのだ。

イヴの家で眠り目覚めた者達は「父 (the Father)」のいる「故郷 (home)」へと向かわねばならない。「故郷」についてアダムはヴェインに以下のように説明する。

[...] home, as you may or may not know, is the only place where you can go out and into. There are places you can go into, and places you can go out of; but the one only place, if you but find it, where you may go out in both, is home. (15)

---

的な吸血鬼伝説や、Stoker の *Dracula* (1897) に代表される他の吸血鬼文学におけるような感染を伴ったものではなく、単純に栄養を取るのを目的とされており赤ん坊の母乳を飲むような行為であると考えられること (ノイマンが女性の経験する三度の「血の変容」の3つ目として「産後血を母乳に変容させること」を挙げている (Neumann 32) ことも参照)。

<sup>15</sup> *Lilith* pp.197-98, 213-14

アダムの説明はやや不可解ではあるが、「故郷」とはそこからやって来て最後そこへ帰る場所—誕生前と死後の場所であると言える。マクドナルドは死後のより豊かな生というものを信じており、この考えは彼のほぼ全ての作品に見出される。『リリス』の「故郷」は死と生の相関する彼の死生観の極致であり、新生を可能にする場所であると考えられる。「死の家」で眠ることにより新生の可能性を得たりリスは、それを実現するために目覚めて「故郷」へと向かわねばならないのだ。しかしながら神に善なる存在で在るようにと創られたのに、自己創造という幻想にしがみ付き、それを達成するために自身を悪に変えてしまった彼女の目覚めには、気が遠くなるような時間を要する。彼女は自身の悪の過去と決別しなければならず、アダムは“[Lilith's wake] is not ripe yet, [...] she is busy forgetting. When she has forgotten enough to remember enough, then she will soon be ripe, and wake” (242) と語る。更に彼はリリスは眠りから目覚める最後の者であろうとまで言っている (218)。

この場面においてもまたローナが重要な役割を果たす。眠りから目覚めた彼女は眠っている母にキスをするが、それはリリスを「故郷」へと近付けるであろうとアダムは言う。

The hour of departure was at hand, Lona went to the couch of the mother who had slain her, and kissed her tenderly—then laid herself in her father's arms.

“That kiss will draw her homeward, my Lona!” said Adam. (240, 強調は引用者)

リリスの行った最も悪い行いは間違いなく自身の娘ローナの殺害であり、娘のキスはそれに対する許しを意味すると考えられ、彼女を目覚めの時に近付ける。母リリスから生命を受け継いだローナは彼女の新生の手助けをする。ローナはリリスの救いなのだ。確かに、アダムの言葉は真であった—「リリスでさえも出産によって救われるだろう」

## 結論

本論は、何故リリスは悪魔的で破壊的になってしまったのか、何故生命の尊さを理解できず、大変尊いものである生命の輪を断絶させてしまったのかに着目した。生命の輪の重要性を示すために第二章で母リリス—娘ローナの特別な結び付きについて示し、第三章では彼女がすべきことは断絶させてしまった生命の輪を再び繋ぎその輪に迎え入れられることであると述べ、そのために彼女には二つの道—「生命の輪の継承」と「新生の可能性」が開かれているという解釈を提示した。そしてそれは序論で引用した「リリスできえも出産によって救われるだろう」という言葉を証明する。

ローナは父アダムに母リリスの両親は誰であるか尋ねる。

“Who are her parents?” asked Lona.

“My father,” answered Adam, “is her father also.”

She turned and laid her hand in mine [Vane’s hand]. (240)

ここでのアダムの答えは不完全である。何故なら「両親は？」と聞かれているのに「父」についてしか答えていないからだ。やはりリリスは母から生命を受け継いでおらず創られた存在であるということが窺われる。だが今や娘ローナに生命を受け継がせ生命の輪を再び結んだリリスは、穏やかに目覚めの時を待つ。更に、娘のキスは新生を可能にする場所「故郷」へと彼女を近付ける。ローナは母から生命を受け取るだけでなく、彼女の新生を助けるという点で、或る意味母に生命を与えるとも言えるのだ。ローナによる「生命の輪の継承」はリリスが真の意味で生命を与えたことを示し、彼女の「新生の可能性」は彼女が真の意味で生命を受け取るであろうことを示す。

注目すべきことに「故郷」への道には生命の川が流れていた—“Over and between those steps issued, plenteously, unceasingly new-born, the river of the water of life” (250)。そう、生命の川は流れ続けなければならないのだ。リリスはも

うローナを「開かれた水路」として憎悪し生命の輪を断絶させることはないであろうし、その代わりに生命の受け手、そして与え手として愛するはずである。リリスはローナを産んだことによって救われるだろう—いや、救われるに違いない。

## 参考文献

- Gaarden, Bonnie. *The Christian Goddess: Archetype and Theology in Fantasies of George MacDonald*. Madison: Fairleigh Dickinson UP, 2011.
- Harriman, Lucas H, ed. *Lilith in a New Light: Essays on George MacDonald Fantasy Novel*. Jefferson: McFarland Publishers, 2008.
- MacDonald, George. *Lilith*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 2000.
- . *Phanastes*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 2000.
- . *The Complete Fairy Tales*. Ed. U. C. Knoepfelmacher. London: Penguin, 1999.
- . *The Princess and the Goblin and The Princess and Curdie*. Ed. Roderick McGillis. Oxford: Oxford UP, 1990.
- . *At the Back of the North Wind*. Eds. Roderick McGillis and John Pennington. Toronto: Broadview Press, 2011.
- MacDonald, Greville. *George MacDonald and His Wife*. Whitethorn: Johannesen, 2005.
- Manlove, Colin. “The Logic of Fantasy and the Crisis of Closure in *Lilith*.” *Lilith in a New Light: Essays on George MacDonald Fantasy Novel*. Ed. Lucas H. Harriman. Jefferson: McFarland Publishers, 2008. 46-58.
- . *The Impulse of Fantasy Literature*. Kent: Kent UP, 1983.
- McGillis, Roderick. “George MacDonald and the Lilith Legend in the XIXth Century.” *Mythlore* 6 (1979): 3-11.
- . “*Phanastes and Lilith: Femininity and Freedom*.” *The Gold Thread*. Ed. William Raeper. Edinburgh: Edinburgh UP, 1990. 31-55.

- - -. "Liminality as Psychic Stage in *Lilith*." *Lilith in a New Light: Essays on George MacDonald Fantasy Novel*. Ed. Lucas. H. Harriman. Jefferson: McFarland Publishers, 2008. 103-10.

Neumann, Erich. *The Great Mother: An Analysis of the Archetype*. Trans. Ralph Manheim. Princeton: Princeton UP, 1974.

Raeper, William. *George MacDonald*. Tring: Lion, 1988.

- - -, ed. *The Gold Thread: Essays on George MacDonald*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1990.

Schaafsma, Karen. "The Demon-Lover: Lilith and the Hero in Modern Fantasy." *Extrapolations* 28 (1987): 52-61.

Wingrove, David Melville. "'La Belle Dame'—*Lilith* and the Romantic Vampire Tradition." *Rethinking George MacDonald: Contexts and Contemporaries*. Eds. Christopher MacLachlan, John Patrick Pazdziora and Ginger Stelle. Glasgow: Scottisg Literature International, 2013. 175-97.

アポロドーロス『ギリシャ神話』高津春繁訳、岩波書店、2012年。

エリアシェフ、キャロライン・エニック、ナタリー『だから母と娘はむずかしい』  
夏目幸子訳、白水社、2005年。

斎藤環『母は娘の人生を支配する—なぜ「母殺し」は難しいのか』日本放送出版協会、  
2008年。

シッパー、ミネケ『なぜ神々は人間をつくったのか』松村一男・大山晶訳、原書房、  
2013年。

松村一男『女神の神話学—処女母神の誕生』平凡社、1999年。